逢い逢いて

安西篤子

新潮社

逢い逢いて

安西篤子

新潮社

逢い逢いて

一九九四年一二月一五日発行

著　者　安西篤子

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号一六二

電話（営業部）03－三二六六－五一一一

（編集部）03－三二六六－五四一一

振替東京四－八〇八

印刷　大日本印刷株式会社

製本　加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Atsuko Anzai

1994, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-392402-0 C0093

目次

福寿草 7
猫柳 35
山躑躅 57
紫藤 83
凌霄花 117

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

真葛 139
石蕗 167
黄菊白菊 195
枇杷の花 227

装画　田渕俊夫
装幀　新潮社装幀室

逢い逢いて

福寿草

（ふくじゅそう）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

柴山周助が御長屋の自分の部屋で朝飯を食っていると、ことりと音がして、戸口があいた。顔を出したのは、銀杏髷に縞木綿の袷を着た十四、五にみえる小娘である。

「やあ、おさとか」

「入ってもいいかい」

「かまわぬ。入れ」

周助が声をかけてやると、さとはいそいそと入ってきて、土間に草履をぬぎ棄て、座敷へ上った。

「ずいぶん早いな」

「起き抜けに出てきたのだもの」

さとの在所の小竹村まで、御城下から二里はある。よほど早起きをしてきたにちがいない。

抱えてきた風呂敷包みを周助の前へ置いて、さとは結び目をといた。

「このところ、朝夕はひどく冷えこむようになったから、一日も早くお前様に着せたいと云って、

かかさんが夜鍋して縫い上げた。それでさっそく届けにきたのじゃ」
木綿の胴着を取り出しながら、さとは云った。
「そうか、それはご苦労」
陰暦十二月に入って、にわかに寒い日が続くようになっていたから、綿入れの胴着はありがたかった。
「これは土産。干柿じゃ」
さとは藁苞を胴着と並べて置くと、風呂敷を畳んだ。
「なんだ、干柿だと？」
周助は顔をしかめた。
「おれが甘いものを食わぬのは、知っておろうに。それより酒の一升も提げてくるがいい」
「あんなことを云って、酒はいつも浴びるほど飲んでいるのではないかい。干柿のほうがよほど薬じゃ。風邪のひきかけに一つ二つ食べると、希代によくなる」
「おふくろは変わりないか」
飯を食い終って、楊枝で歯をせせりながら、周助は訊いた。
「かかさんは、しごく達者じゃ。お前様に、『体に気をつけて、落度のないようにご奉公せよ』と伝えるようにと云われた」
「いつもの決まり文句だな」
周助は鼻の先で笑った。
「それほど伜の身が案じられるなら、たまに小遣い銭ぐらいよこすがいい。しわい婆め」

「あれ、罰当りなことを云う。今年は雨続きで作柄もわるく、御年貢を納めるのがやっとだそうな」

柴山周助は、小竹村の農家の五男である。長兄が家を継いだから、家にいても厄介者だった。もともと百姓仕事がきらいで、もっと気の利いた暮しがしたいと思っていたところへ、小竹村を知行所とする平山家で奉公人を探していると聞き、さっそく御目見に上った。十八歳のときである。平山家の当主の修理は、三千石を賜わって家老職を勤めている。

周助は修理の気に入った。上背がある上に骨組ががっしりしており、膂力もある。しかも色白でととのった目鼻立をしていた。菩提寺の和尚に教わって読み書きも一応でき、用事をいいつけてもそつなくこなした。修理ははじめのうち、若党として外出の供などさせていたが、やがて侍に取り立てた。とうに亡くなった家来の名跡を継がせて、柴山と名乗らせた。

思いがけなく士分に昇って二刀を帯するようになった周助は、気をよくして、しばらくはまめまめしく働いた。が、四、五年もたつうちに、生来の懶け心が、頭をもたげてきた。

侍といえば聞こえはいいが、年三両の給金では、寝酒もめったに飲めない。たまには女も抱きたいが、その金もない。在所の母に手紙をやって小遣い銭をせびるが、隠居している母も手元は苦しいとみえて、三度に一度は断わられる。

あるとき、周助は石蔵という男に手慰みに誘われた。石蔵は、平山家からほど近い中老真壁勘解由の邸に仕える若党である。石蔵の小屋へ賭け事好きが集まった。

小銭を賭ける骰子博奕に、周助ははじめて加わった。さすがに最初のうちは金を巻き上げられるばかりだったが、二度三度と通ううちにコツを呑みこみ、おもしろいように勝ちはじめた。

周助は、引き際があざやかだった。今日はツイていないと思うと、さっさと帰ってくる。また、大勝すると、いい加減のところで切り上げてしまう。ふつうは、負けると熱くなってやめられないものだし、勝てば勝ったで欲が出るのだが、周助は勝っても負けても、自分を見失うということがなかった。

博奕に勝って少し金ができると、周助は飯炊の源七に酒を買ってこさせて、毎晩のように飲んだ。南町の色里へ出かけて安い女も買った。

遊里へ出入りするようになって、周助は自分が女たちから好かれることに気づいた。女たちは、身揚がりしても若くて様子のいい周助と寝たがった。周助は金を使わずに済むばかりか、女から小遣い銭をもらうことさえあった。

遊び癖がついた分だけ、周助の御前の首尾はわるくなった。主人の修理が用があって呼んでも、腹が痛いとか風邪を引いたと称して出てこない。じつは泥酔して寝ているのである。そういうことが度重なって、修理も見放した。修理は御城下の西の浅間町に下屋敷を賜わっている。周助にこの下屋敷詰を命じて、体よく本邸から追放した。

平山修理は茶人として知られており、下屋敷にも茶室を設け、庭園も美しくこしらえた。かつて殿様の御成を見たこともある。しかし近年は御用繁多で、修理はめったに下屋敷へは姿を見せない。周助のほかわずかな留守番の者がいるばかりである。

代りにしじゅう現われるのが、修理の三男の栄三郎だった。

平山修理には、隼人・忠次郎・栄三郎の三男がある。隼人は秀才として知られ、仕置添役に任じられている。修理が隠退すれば、その跡目を継ぐであろう。忠次郎は幼年のころから御小姓に

召し出され、いまは御近習の一人である。三男の栄三郎は学問・武芸一通りは学んだものの、世上の評判はあまりよくない。同年輩の友人を集めては、つまらぬ遊びにふけると噂されている。父の修理は、しかるべき家に養子にやりたいと思っているが、悪評が祟っていっこうにどことも縁組できずにいる。

谷町の本邸では父の眼が光っているので、栄三郎は清遊と称して下屋敷へ来ては、仲間と酒を飲み、博奕をする。周助は命じられて酒席の取持をした。年ごろが近いので、栄三郎は周助に親しみを覚えたとみえて、重宝に召し使う。そのうちに周助も遊びにかけては人後に落ちないとわかると、自分の腹心にしてしまった。周助は、栄三郎とその仲間の博奕に加わるばかりか、色里へも幾度か案内した。

もっとも、どれほど身分を隠しても、家老の子息では目立ってしまう。それで周助の斡旋で、芸妓たちをひそかに下屋敷へ呼び、酌を取らせた。役に立つ男だというので、栄三郎は周助に眼をかけ、心付けも充分にくれたから、周助は小遣いに不自由しないようになった。色里に馴染の女もでき、足繁く通っている。

いまや栄三郎は、周助にとって大切な金蔓だが、その栄三郎が妙なことを云っていたのを、周助は訪ねてきたさとを見ると同時に思い出した。

「おさと、お前、いくつになる」

台所でことこと働いていた飯炊の源七が、客来とみて白湯を汲んで出した。その熱い湯の入った茶碗を両手に持って、ふうふうと吹きながら飲んでいるさとを、周助はじろじろ見ながら訊いた。

「おれかい？」
こう訊き返したさとは、なぜかうす赤く頬を染めた。
「なんでそうおれのことを見るのだい」
茶碗を持ったまま、さとはきまりわるそうにうつむいた。
周助は笑い出した。
「ははあ、さてはおさとも色気づいてきたな」
「なにを云う。そんなのではない」
「そうむきになるところが愛らしいわい」
「とんだてんごう口を利きやる。憎いお人じゃ」
口ではそう云いながらも、かくべつ腹を立てた様子もなく、肩をひねって科を作った。そういうしぐさを見ているうちに、女にかけては手練の周助は、難なくさとの心中を読みとった。
さとは、小竹村の周助の生家に養われている少女である。周助の母をかかさんと呼んでいるが、実の娘ではない。遠縁のもので、双親が早く亡くなり、孤児になったため、周助の母が憐れんで引き取った。さとが三つ四つのころのことである。
生れつき気立のいいさとは、養ってもらった恩を忘れず、くるくるとよく働いたから、周助の母の気に入り、実の娘同様に可愛がってきた。
生家にいたころの周助は、さとが家族の中に加わったときも、妹が一人ふえたぐらいに思い、ほとんど気に留めなかった。
そのさとが、ここ二、三年、しばしば周助を訪ねて御城下へ出てきた。母の使いで来るのであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com